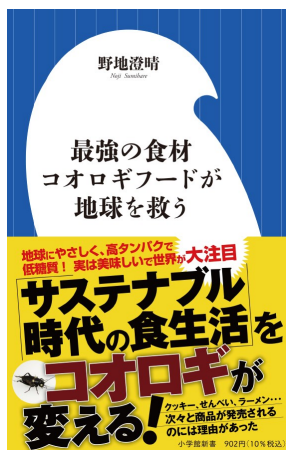


もりと かつや
衛生化学分野 助教 森戸 克弥

『最強の食材 コオロギフードが地球を救う』
野地澄晴 著
小学館

世界人口の増加に加えて、国連世界食糧計画（WFP）の推計によると、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行のため、最低限の食糧を入手することさえ困難な状況にある人口が倍増しているようです。我々が健康で生きていくためには、日々の食生活が重要であることは言うまでもありませんが、残念ながら我が国の食料自給率はあまり高いとは言えず、世界人口が増加すればするほど、諸外国から輸入される食糧も減少する可能性



があります。もちろんそのような状況に陥らないために様々な方策が取られているわけですが、この本では、わが国だけでなく世界中の食糧危機を救う手段の一つとして近年注目されている「食用コオロギ」を紹介しています。

「昆虫食」と聞くとゲテモノ食いのイメージが強いかもしれませんが（実際、私はそのようなイメージを抱いてしまいます）が、最近では、「コオロギ・パウダー」を混ぜ込んだ商品が発売されて話題となっていることを、ご存じの方もいると思います。

本書には昆虫食の中でもコオロギ食のメリットや今後の可能性に加え、商品開発秘話などがとても読みやすい文章で綴られています。あくまで可能性の話ですが、将来的に「コオロギ」が栄養機能食品に…なんてことになれば、薬剤師にとっても勉強すべき対象になると思われます。毎日の食卓に昆虫が並ぶ未来が本当に来るかどうかは別として、本書は、日々の食生活や食品ロスなどについて改めて考えるきっかけを与えてくれる、そんな一冊かもしれません。

おおた しゅうと
情報管理推進室 太田 周人

『ぼくはイエローでホワイトで、
ちょっとブルー』
ブレイディみかこ 著
新潮社

イギリス南部の港町ブライトンに暮らす、アイルランド人の父と日本人の母（著者）を持つ中学生の学校生活を中心に綴られたエッセイ。

彼は名門小学校に通っていましたが、中学校への進学の際、多くの同級生が選ぶ系列の名門校ではなく、評判のいいとは言えない公立校を選択します。この中学校には、人種も貧富も様々な子どもたちが通っており、英国社会が抱える格差、貧困、差別等の問題を色濃く投影した出来事が次々と起こります。

もし自分の子どもたちが彼と同じように、平和で恵まれた環境から180°異なる環境に自ら飛び込むとしたら、親である自分はどうするだろうかと考えながら読みました。



この社会には単純で綺麗なもののばかりではなく、複雑で醜いものもたくさん存在します。それらを目に留めることなく大人になることは快適で幸せかもしれませんが、いつかそれらに遭遇したとき、上手く向き合うことができないかもしれません。中学校での人間関係に悩む彼から「多様性とは本当にいいことなのか」と尋ねられた著者が言います。

「多様性はうんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らせるからいいことなんだと母ちゃんは思う」

新たな環境で奮闘する彼の言動、そして複雑な問題に真摯に向き合う親子の会話は、自分の価値観とは異なるものについて「知る」ということの大切さを教えてくれます。また親の立場としては、子どもの選択を尊重し、共に考え意見を交わす著者の姿勢を見習おうと思われました。

この中学校で彼は他校との格差、差別やいじめ、同級生の貧困問題等、様々な問題に直面しますが、そのたびに悩みながらも自分の考えを持って、家族と話し合い、それらの問題に向き合っていきます。そんな彼の学校生活と家族の会話からは、どの年代でも学べることや気づかされるものがたくさんあるのではないかと思います。

2021年9月には続編もリリースされています。ぜひ併せて読んでみてください。